

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02145

研究課題名(和文)「時間の社会学」の現代的創成 公理論化と学説・応用研究を総合した社会的時間の解明

研究課題名(英文) Establishing the contemporary sociology of time: Conceptions of social time elucidated via integration of axiomatic method and theoretical, historical, and applied studies

研究代表者

高橋 顕也 (Takahashi, Akinari)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：60739796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：成果は以下の6点にまとめられる。

a) 「社会的時間」概念、時間の4類型、およびシステム理論的時間論について公理論的な解明を行った。b) 「社会的時間」をめぐる時間の社会学の学説史の流れの一端を明らかにした。c) 共同性の成立や解体、個人の実存の成立や疎外と、社会的時間の関係を明らかにした。d) ルーマンの時間論について、コミュニケーション・メディアとしての時間と、時間メディアと時間形式の区別という可能性を提起した。e) 19世紀を通じて「無限なき進歩」の観念は常に「退歩」や「循環」と競合していたことを明らかにした。f) 見田のニヒリズム論を道具主義と交換価値という近代社会の価値感覚の問題として再構成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は主に以下の6点にまとめられる。

a) 社会学的時間論に対する公理論化という方法論の適用に成功した。b) 時間の社会学の今後のさらなる展開のための基礎的な意義をもつ。c) 社会学理論の主要なテーマである共同性の成立や解体という問いに時間論の観点から取り組んだ点にある。d) 社会的時間の統一化と多元化の双方を同時に論じることのできる理論としてルーマンの時間理論が意義をもつということを、明らかにした。e) 近代的な時間意識との関わりにおいて、近代の社会変動観の多様性を捉え直すことを可能にした。f) 見田の所論は、時間意識と自我意識をともに扱っており、時間の社会学と自我論の接続に対して示唆に富む。

研究成果の概要(英文)：This research project a) elucidated the axiomatic systems of the concept of social time (Sorokin & Merton), the four ideal types of time (Mita), and the time concept in sociological systems theory (Luhmann), b) clarified a part of the history of the sociology of time in terms of “social time”, c) clarified the relationship between collectivity, individuality and social time on the basis of the time theory of Halbwachs and Durkheim, d) indicated the potentialities of Luhmann’s conception of time as communication medium and its forms, e) elucidated that the idea of Indefinite Progress had been always contested by such ideas as Regress and Cycle in the nineteenth century Western thought, f) interpreted Mita’s theory of nihilism as a question of modern sense of instrumentalism and exchange value.

研究分野：理論社会学

キーワード：時間の社会学 社会理論 社会学史 公理論化 社会的記憶 未来構想 進歩の観念 デュルケーム学派

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

今日に至るまで、社会的時間に関する個別の理論研究、経験的研究の蓄積はさまざまなされてきたものの、それらを総合する「時間の社会学」は不在であった。したがって、社会学的時間概念、および社会学が主題とする時間現象すなわち社会的時間の総合的解明を行うことが必要となっている。

本研究は、公理論化を方法論として用いることで、社会学的なさまざまな時間概念および時間論をどのように・どこまで形式化し、比較・総合し、経験的研究へ応用することが可能であるかをリサーチ・クエスチョンとした。

2. 研究の目的

上記のリサーチ・クエスチョンから、本研究は社会学的時間概念について(1)公理論化研究、(2)学説研究、および(3)応用研究の3つの領域において、下記の通り、合わせて6つの研究目的を掲げた。

(1) 公理論化研究

目的 社会学的時間概念を、実数と同等の公理系として数量的に解釈される物理学的時間概念と対比して、既存/現在の差異が単位となっている出来事の集合と定義した上で、その時間論が、先行、並行、後続、または包含を出来事間の基本的な関係とする種々の公理系として解釈されうることを示す。

(2) 学説研究

目的 E・デュルケーム以来、社会学はさまざまな仕方でも時間について論じてきた。現在では、「時間の社会学」は一つの独立したサブディシプリンであるとさえ言われるほどに発展している。しかしながら、時間の社会学のそうした発展の歴史は、必ずしも十分には明らかにされていない。この背景をふまえ、時間の社会学の学説史を解明することを目指す。時間への社会学的なアプローチはどのようになされてきたのか、それはどのように変化してきたのか、どのような意義と課題をもつのか その一端を明らかにする。

目的 「時間の社会学」に関わる理論・学説研究の一環として、社会学的時間論の古典であるデュルケームおよびその学派における時間概念の検討を行うことが肝要と考え、E・デュルケームおよびM・アルヴァックスの時間論の検討を行う。研究の目的は、共同性の成立や解体、個人の実存の成立や疎外において、社会的時間のあり方がどのような影響を与えるのか、およびその際の社会的時間のあり方とはどのようなものかを明らかにすることにある。具体的には、宗教という要素が共同性や実存の成立に、経済という要素が共同性の解体や実存の疎外に深く関わるものであることを明らかにする。

目的 社会的時間の解明に理論的に取り組んでいる研究としてたびたび注目されてきたのが、ニクラス・ルーマンによる社会システム理論と、そのもとでの社会学的な時間理論である。そこで本研究では、「時間の社会学」の諸学説と諸研究を総合するための視点として、ニクラス・ルーマンの社会システム理論に基づく社会学的な時間理論を検討する。特に社会的時間あるいは社会や社会の各領域に特有の時間を社会システムの時間として、さらにコミュニケーション・メディアとしての時間について、研究を行う。

(3) 応用研究

目的 応用研究では、社会学的時間概念の公理論化を踏まえながら「過去」や「未来」に関する社会(学)思想を再検討した。まず、近代の社会思想は、時間の集合と出来事の集合をどのように結びつけてきたのか。多くの文献は、19世紀西洋の社会変動観が近代特有の「直線的」時間意識に対応して「真つすぐ」前進していくような「進歩」のイメージばかりを思い描いていたとする。こうした社会変動観に関する所説は、どの程度まで正しいのか。この点については、時間の社会学の研究においても十分に検討されてこなかった。そこで本研究では 進歩 観念の歴史を辿りなおすことで、あらためて近代の時間意識と社会変動観の関わりを問い直すこととした。

目的 従来の社会学において、研究対象とされる社会や行為は、現在もしくは過去のものに傾斜していた。時間の社会学においても、主として行為や意識における時間的な要素が論じられ、未来を(集合的に)予見または構想し、表象する際の諸問題については考察が不充分であった。したがって、社会学には「未来」に関する研究が不足しており、社会学が「未来」を扱うことの可能性や方法論は十分に検討されていない。人間が未来を予見したり構想したり、(集合的に)表象したりすることがいかにして可能か、そのように表象された未来像が現在の社会や行為に

いかなる影響を与えるか、個々人の未来には必ず死が待っているが、それが虚無感(ニヒリズム)をもたらすのはいかなる理路によってか、またそれは必然かといった、人間と社会における「未来」の諸問題について考察し、「未来構想の社会学」の可能性を検討する。

3. 研究の方法

前項の6つの目的に対応したそれぞれの方法を記載する。

(1) 公理論化研究

方法 国外(独英仏語圏)・国内の文献を参照し、学説研究との討議を通して、第一にシュッツおよびルーマンの時間論について公理を解明し、社会的時間に関わる各理論の諸命題が導かれるシンタックスを形式化し、可能な諸公理論を構成する。第二にそれらの諸公理論間の関係を整理し、理論比較を行う。

(2) 学説研究

方法 文献研究を実施。第一に、デュルケームの『宗教生活の基本形態』やG・ギユルヴィッチのThe Spectrum of Social Time、N・エリアスの『時間について』といった時間についての社会学的研究と、第二に、G・プロノヴォストのThe Sociology of Timeなどの時間の社会学についての研究を収集し、集中的に読解する。

方法 M・アルヴァックスの集合的記憶論(『記憶の社会的枠組み』、『集合的記憶』)とE・デュルケームの『宗教生活の基本形態』を精読し、その時間概念の内実について明らかにするとともに、学説史的な背景も踏まえてその時間論の意義を論じる。

方法 N・ルーマンの社会システム理論に基づく社会学的な時間理論を、ルーマン自身は可能性を示唆するにとどめた時間メディアと時間形式という二項図式を伴う時間理論として再構成する。そのうえで、既存の「時間の社会学」を学説史的に再考し、ルーマンを参照した社会学的な時間理論の位置づけを明らかにする。

(3) 応用研究

方法 応用研究では、まず「観念の歴史」と呼ばれる英語圏の研究蓄積を読み直した。このテーマに関する古典としてビュアリの『進歩の観念』(1920年)とニスベットの『社会変動と歴史』(1969年)をひもとき、これらを批判的に引き継いだピック、ボウラー、ホーキンスの進化思想史研究についても検討した。これらの文献をもとに、19世紀の西洋思想は専ら 進歩 観念であったのかを吟味した。

方法 未来を論じた数少ない社会学的な研究として、真木悠介『時間の比較社会学』(1981年)、若林幹夫『未来の社会学』(2014年)、J・アーリ『未来像の未来』(2016年)などを読解し、社会学が「未来」を扱う際の可能性や方法論に関する含意を引き出す。特に、真木悠介(見田宗介)の著作を参照し、近代の未来意識と死の恐怖やニヒリズムとの関係性を解明する。

4. 研究成果

6つの研究目的に対応するそれぞれの研究成果を記載する。

(1) 公理論化研究

成果 Sorokin & Merton (1937) による社会的時間(social time)概念に相当する公理系を解明し、それに基づき、見田宗介による「時間の4類型」論を公理論化によって整理した。これにより、社会学的時間概念も、集合論の語彙を用いて公理論化が可能であることを示した。加えて、N・ルーマンの社会学的システム理論の基本概念であるシステム、メディア、形式、および時間(時間メディアと時間形式)について公理系を構成し、「システムにおける時間の構成」という彼独自の命題が導き出される論理を明らかにした。

(2) 学説研究

成果 時間の社会学の発展の歴史が必ずしも十分には検討されていないという問題意識のもと、一貫して研究を行った。その成果は、大きく以下三つにまとめることができる。すなわち第一に、デュルケームの『宗教生活の基本形態』以来1960年代ごろまでの、主に暦などの社会生活のリズムを規定する質的な時間を研究していたのが初期の時間の社会学である一方で、それ以降の後期の時間の社会学は、クロックタイムないしは近代的時間と呼ぶことのできる、量的で抽象的な時間を主に研究対象にしていることが示された。また第二に、これら初期と後期の関係は、本研究の先行研究者であるB・アダムやJ・アーリの見立てによれば「図式の修正過程」として理解されるが、これに対して本研究は、この関係を「図式の展開過程」とする読み筋を提示した。そして第三に、このような「図式の展開過程」という時間の社会学史理解に立つことは、

時間の社会学が有していると言われる「研究の断片化」(ハルトムート・ローザ)という問題の解決のための可能な方途であるということを示した。ただ本研究はいくつかの課題をもつ。主要なものとしては、時間についての経験的研究と、社会理論における時間の位置づけについて十分な検討ができていないというものである。今後はこれらの課題について集中的に取り組み、時間の社会学の歴史をより総体的に記述することを目指す。

成果 「時間の社会学」に関わる理論・学説研究の一環として、社会学的時間論の古典であるデュルケームおよびその学派における時間概念の集中的な検討を行った。まず、2019年度および2020年度にかけては、M. アルヴァックスの集合的記憶論を取り上げ、ベルクソンとデュルケームとの比較を交えながら、時間と空間との相関関係、空間における象徴のあり方と時間との相関関係を明らかにした。また、経済が時間の加速や解体を、法や宗教が連続性および共同性の形成に寄与する原理である点も明らかにし、共同性の成立や解体、個人の実存の成立や疎外において、社会的時間のあり方が持つ重要性を明らかにした。そして2021年度では、上述の研究成果の知見に基づきE. デュルケームの『宗教生活の基本形態』を読解し、デュルケームの時間論の主題が、所与の共同性に基づく時間が人々をどのように拘束しているのかを説明することではなく、共同性を生み出す時間が成立する機制を「聖なるもの」や「集合的沸騰」という概念によって説明することにあることを明らかにした。また上述の成果から、社会的時間論、特にデュルケーム学派のそれは、学説史的・理論的には宗教社会学との関連から考察される必要があるという結論を導き出し、今後の研究の展望を描いた。

成果 今日に至るまで、社会的時間に関する個別の理論研究、経験的研究の蓄積はさまざまなされてきたものの、それらを総合する「時間の社会学」は不在であった。そこで、これまでの「時間の社会学」の諸学説と諸研究を総合するための視点をもたらし可能性のあるものとして、ニクラス・ルーマンの社会システム理論に基づく時間論を検討した。ルーマン自身、社会システム理論の観点からさまざまな形で時間について論じているが、必ずしも確固とした時間理論として論じているわけではない。したがって本研究課題では、あらためて社会学的な時間理論としての再構成をおこなった。そこでとりわけ、コミュニケーション・メディアとしての時間と、時間メディアと時間形式の区別という可能性を提起した。また「時間の社会学」はその古典以来、社会的時間の統一化と多元化の双方を取り扱ってきたにもかかわらず、近代的時間論の興隆ともに多元化の方向が少なからず覆い隠されてきた。そして本研究課題の各研究が明らかにしたように、近年あらためて社会的時間の多元化、分化の方向が再注目されるに至っている。そうしたなかで本研究では、社会的時間の統一化と多元化の双方を同時に論じることのできる理論としてルーマンの時間理論が意義をもつということを示し、明らかにした。

(3) 応用研究

成果 既往の研究知見を確認した結果、近代の社会変動観は非常に多様であったことが確認された。ビュアリとニスベットによると、たしかに19世紀の西洋においては人類の社会はどこまでも良くなっていくとする 際限なき進歩 という観念が広がった。しかし、それに対抗する 終局に向かう進歩 という観念も現れた。物事は悪い方向に向かうとする 退歩 の観念や、進歩と退歩を繰り返すとする 循環 の観念も衰えることはなかったという。またピック、ポウラー、ホーキンズは、ビュアリやニスベットにもまして 終局に向かう進歩 や 退歩 や 循環 の重要性を指摘している。しかも、ポウラーによれば19世紀以降これらの 発展 モデルの全てに 非発展 の思想が対抗を始めた。これらの研究蓄積に基づき、近代の社会変動観は近代の時間意識と同様に「真つすぐ」前進するという進歩観ばかりだったとの見方は支持できないことが明らかになった。

成果 見田宗介の時間論について、反復的・円環的・線分的・直線的という四つの時間類型をこえるかたちでの内在的読解によって、近代人のニヒリズムが「道具主義」(instrumentalism)と「交換価値への疎外」という二つの価値感覚の合成の帰結として存立する、という理論図式を再構成した(図1)。また、ニヒリズムから逃れようとする意識が、20世紀には未来主義(進歩主義)に行き着くことの論理的な必然性を確認した。同時に、J. アーリや若林幹夫による「未来の社会学」を検討し、社会学において未来時間や未来意識や未来像がどのように扱われてきたか、あるいは扱いつつあるかを展望した。以上を総合し、見田のニヒリズム論を、現代における弱気な進歩主義としての「持続可能な開発」という若林幹夫の所論に接続することで、時間の社会学の観点から未来構想を批判的に検討するための方法を考察した。その結果、持続可能な開発目標(SDGs)の推進派および反対派がそれぞれに描いている未来像を現在の社会状況と関連づけながら論じるという、知識社会学的な研究の可能性について示唆を得ることができた。

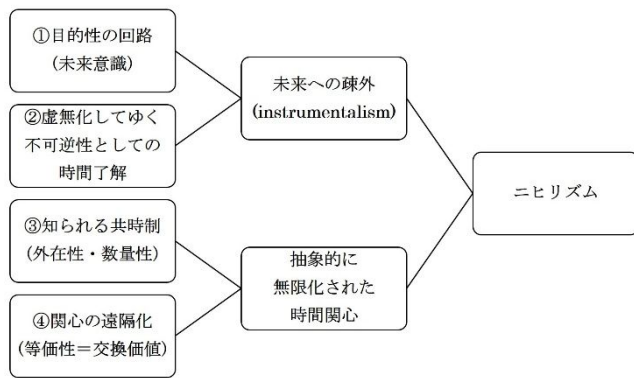


図 1 見田におけるニヒリズムの契機

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 金瑛	4. 巻 37
2. 論文標題 時間・空間・表象 アルヴァックスの時間論をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学雑誌	6. 最初と最後の頁 112-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/E0042282	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 徳宮俊貴	4. 巻 37
2. 論文標題 見田社会学における未来とニヒリズム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学雑誌	6. 最初と最後の頁 128-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/E0042283	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋顕也	4. 巻 37
2. 論文標題 社会的システム理論におけるメディア・形式・時間・システム概念の数理的構造をめぐる試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学雑誌	6. 最初と最後の頁 103-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/E0042281	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梅村麦生	4. 巻 37
2. 論文標題 ニクラス・ルーマンの時間論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学雑誌	6. 最初と最後の頁 81-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/E0042280	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平	4. 巻 37
2. 論文標題 退歩の観念を葬ったのは誰か P・ボウラーとM・ホーキンスの進化思想史再読	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学雑誌	6. 最初と最後の頁 145-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/E0042284	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平	4. 巻 第6回
2. 論文標題 なぜ災害研究は職業生活を論じないのか 生活構造・職場集団における「仕事」の意味	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東日本大震災研究交流会 研究報告書	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平	4. 巻 33
2. 論文標題 なぜ被災労働者は復職するのか 原子力災害下の飲食事業者における職業意識の再編	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 204-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5690/kantoh.2020.204	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TAKAHASHI Akinari	4. 巻 55(3)
2. 論文標題 Mita's Four Ideal Types of Time Revisited: Axiomatization of Sociological Concepts of Time (1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ritsumeikan Social Sciences Review	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳宮俊貴	4. 巻 14
2. 論文標題 見田宗介の社会学理論における近代価値空間の反転と裂開 70年代の理論構想の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代社会学理論研究	6. 最初と最後の頁 70-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平	4. 巻 5
2. 論文標題 東日本大震災と仕事生活 2015年国勢調査にみる沿岸部市町村の就業状態変動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第5回震災問題研究交流会 報告書	6. 最初と最後の頁 54-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平	4. 巻 30
2. 論文標題 再建する事業所、復職する従業員 福島原発事故と福祉系V法人労働者の職業意識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本労働社会学会年報	6. 最初と最後の頁 114-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20750/arls.arls030.114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鳥越信吾	4. 巻 30
2. 論文標題 近代的時間と社会的認識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日仏社会学年報	6. 最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田耕平	4. 巻 43
2. 論文標題 十九世紀西欧思想史と 際限なき進歩 への抵抗ーJ・B・ピュアリとR・ニスベットの觀念史研究を再読する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学史研究	6. 最初と最後の頁 83-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Torigoe, Shingo	4. 巻 92
2. 論文標題 Waiting as a Negative Action	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間と社会の探究	6. 最初と最後の頁 117-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳宮俊貴	4. 巻 66
2. 論文標題 見田宗介における「交響」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 金瑛
2. 発表標題 デュルケーム時間論の再考 宗教論と象徴論を中心に
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋顕也
2. 発表標題 社会学的システム理論におけるメディア・形式・時間・システム概念の数理的構造をめぐる試論 社会学的時間概念の公理論化(2)
3. 学会等名 第71回関西社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徳宮俊貴
2. 発表標題 エゴイズムと交響のあいだ 見田宗介の「個」の理論をめぐる問題提起
3. 学会等名 第15回日本社会学理論学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徳宮俊貴
2. 発表標題 現代社会(学)における未来意識
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徳宮俊貴
2. 発表標題 見田宗介のコミュニケーション論の射程 理論体系の内在的再構成のために
3. 学会等名 日本社会学会研究例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鳥越信吾
2. 発表標題 時間の社会学をたどり直す
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梅村麦生
2. 発表標題 社会システムの時間
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田耕平
2. 発表標題 進歩 と 秩序 の系譜 19世紀の社会学における「際限なき進歩」觀念の欠落
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋顕也
2. 発表標題 真木「時間の4類型」・再考 社会学的時間概念の公理論化(1)
3. 学会等名 第70回関西社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥越信吾
2. 発表標題 時間の社会学のいくつかの潮流
3. 学会等名 第2回「社会の時間」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥越信吾
2. 発表標題 時間の社会学を振り返る
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Torigoe, S.
2. 発表標題 On Waiting Experience: From a Schutzian Perspective," Past, present, and future of phenomenological, interpretative and hermeneutic sociology.
3. 学会等名 A symposium for a partnership between Keio University and University of Vienna (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梅村麦生
2. 発表標題 時間のメディアと形式
3. 学会等名 第2回「社会の時間」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梅村麦生
2. 発表標題 時間のメディアと形式 ニクラス・ルーマンのコミュニケーション・メディア論から考える社会的時間
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金瑛
2. 発表標題 フランス社会学における時間論の再検討
3. 学会等名 第2回「社会の時間」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金瑛
2. 発表標題 時間を論じる視角としての空間 モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論を中心に
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田耕平
2. 発表標題 進歩の観念の変容と社会科学者の社会の時間
3. 学会等名 第2回「社会の時間」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田耕平
2. 発表標題 進歩の觀念の変容と社会科学者の社会の時間 社会は捉えられなくとも、社会の変化は語らねばならない
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳宮俊貴
2. 発表標題 社会学理論における時間的契機の所在 見田宗介の所論を事例として
3. 学会等名 第2回「社会の時間」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳宮俊貴
2. 発表標題 見田社会学の理論構造における時間的契機と社会的契機 「時間の社会学」から「社会学の時間性」へ
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳宮俊貴
2. 発表標題 見田社会学の内在的・総体的理解をめざして 過渡期 における価値論の検討を中心に
3. 学会等名 第14回日本社会学理論学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 金 瑛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 250
3. 書名 記憶の社会学とアルヴァックス	

1. 著者名 油井清光、白鳥義彦、梅村麦生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 社会学	

1. 著者名 中西 真知子、鳥越 信吾	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 グローバル社会の変容	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	梅村 麦生 (Umemura Mugio) (70758557)	神戸大学・人文学研究科・講師 (14501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉田 耕平 (Yoshida Kohei) (90706748)	東京都立大学・人文科学研究科・客員研究員 (22604)	
研究分担者	鳥越 信吾 (Torigoe Shingo) (00839110)	十文字学園女子大学・社会情報デザイン学部・講師 (32415)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金 瑛 (Kin Ei)		
研究協力者	徳宮 俊貴 (Tokumiya Toshiki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関